

第9回 野口米次郎のワイルド紹介

(1)野口米次郎

ヨネ・ノグチで知られる野口米次郎(1875-1947)は、明治8年(1875)に愛知県に生まれた。8、9歳で初めて英語を学び、明治23年(1890)に上京し、神田の成立学会(私立中学)に入学した。明治26年(1893)には渡米した。同じ留学でもこれまで紹介してきた島村抱月(1871-1918)や平田禿木(1879-1943)とは違って、欧米で文学を学んでいる。野口は明治28年(1890)の*Seen and Unseen*でアメリカの詩壇にデビューした。明治37年(1904)に帰国し、明治39年(1906)より慶應義塾大学英文科の教授となった。野口はオックスフォード大学でも講演を果たしている。戦前の日本で、英語で日本の芸術を海外で講演した文学者には、他に新渡戸稲造(1862-1933)、岡倉天心(1863-1913)などがいる。野口は明治41年(1908)10月の『慶應義塾学報』(第135号)で「ラスカ -、ワイルドの復活理由」、明治42年(1909)6月の『太陽』(第15巻第8号)では「オスカー、ワイルドの一面」などを発表した。

(2)「ラスカー・ワイルドの復活理由」

「欧洲文壇に於ける英国のラスカ -、ワイルドの評判は眞個にバイロン以来の出来事であるさうだ」⁽¹⁾で始まる「ラスカー・ワイルドの復活理由」では、*The Ballad of Reading Gaul* と *De Profundis* の出版がまずワイルド復活の契機になったことに言及している。しかし、‘Helas’を取り上げ、獄中生活以前と以後のワイルドの変化を指摘していることは注目に値する。

自分が自分を批して良心を否定する審美学者といつたのは彼の青年時代のことで晩年に至つては眞理の崇拜者と成つて死んだといつてよい、而して彼は人間悲劇の詩人であつて、単にサロームの作者たるばかりでは無いのである。⁽²⁾

詩人でもある野口がワイルドを「美妙的な音楽と豊かな美な想で満ちて居る美文家」⁽³⁾評していることも付け加えておきたい。また、この論文は

ワイルドは文学界に異才を放つた天才で、其一生の変化あつて晩年の悲哀と寂寞を極めたのはポーに比す可く又小説的であるのはバイロンに比す可しだ、他日彼の著書に関して紹介するとする。⁽⁴⁾

として締めくくられている。

(3)「オスカ -、ワイルドの一面」

「オスカ -、ワイルドの一面」はこれまで大きく取り上げられてこなかった。冒頭にア

ンデルユ、ジイドからの翻訳とあるが、これはアンドレ・ジイドの *Oscar Wilde* の抄訳である。

欧陸文壇に於けるワイルドの復活は近来の出来事だ、従つて彼に関する著書多く出版せられるを見て、仏国文士アンデルユ、ジッド彼の晩年を草して、未だ人の知らせるもの公にした、竝に翻譯する所は即ち其の一筋に、ワイルド研究者の一好材料たるを疑は無い。⁽⁵⁾

ジイドのワイルド論については大正2年(1913)の和気律次郎訳『オスカア・ワイルド』(春陽堂)をはじめ、翻訳も次々に紹介されているが、野口米次郎はいち早くアンドレ・ジイド(André Gide, 1869-1951)のワイルド論を日本に紹介したひとりかもしれない。

参考資料

- 河上徹太郎「ジイドとワイルド」(『作品』第2巻第9号～第11号, 1931年9月～10月)
高樹一郎「ジイドとワイルド」(『社会』第4巻第11号, 1935年12月)
平井博「André Gide と Oscar Wilde」(『オスカー・ワイルド考』松柏社, 1980年7月)
山内昶『ジッドの秘められた愛と性』(筑摩書房, 1999年12月)
野口米次郎『野口米次郎選集』(3 海外文学・評論)(クレス出版, 1998年7月)

注

- (1) 野口米次郎「ヲスカ -、ワイルドの復活理由」(『慶應義塾学報』第135号、1908年10月), p.52.
- (2) Ibid., p.55.
- (3) Ibid., p.54.
- (4) Ibid., p.55.
- (5) 野口米次郎「オスカ -、ワイルドの一面」(『太陽』第15巻第8号、1909年6月), p.118.